

学校研究の発展に向けて

1. 学校研究の発展 - その必然性 -

3月、学校研究は、当該年度の営みを総括する時期を迎える。それは、1年間の実践研究の整理であるとともに、次年度の学校研究のスタートを意味している。

学校研究は、単年度では完結しない。本連載の5月号で叙述したように、そのテーマは、1) 社会的要請と学校の伝統・歴史が統合されている、2) 焦点化されていながらも多様化しているといった性格を帯びている。それゆえ、ある面では研究成果が確認されても、違う面では問題が残っているという状況が通例だ。換言すれば、完璧な成果を手にするのがないのが、学校研究の常なのである。

さらに、学校研究のプロセスは、変化に富んでいる。例えば、先月号で叙述した、学校研究における小中連携は、夏休み等の合同研修会の開催によって一気に熱を帯びるかもしれない。逆に、12月号で論じたように、学力調査の結果によって、学校研究の枠組みを再構築せざるを得ない状況に教師たちが追い込まれる場合も想定される。つまり、予定したとおりには進まないのが、学校研究の性なのである。

学校研究のテーマやプロセスの複雑さ、動的性格は、教師たちに、年度をまたいでそれを発展させることを強く要請する。

2. 学校研究総括の準備作業

学校研究を総括するために、3月、教師たちは、どのような準備作業に従事すればよいのであろうか。それを解説してみよう。

(1) 研究ポートフォリオの作成

実践研究に熱心に取り組む学校では、1年間に数多くの資料やデータが蓄積される。研究集会等で配布された学校研究の構造図、各学年の年間指導計画表、学力調査の結果を示す統計など、その内容も多岐にわたる。研究授業の指導案、授業記録、事後検討会での討論の記録など、各種実践記録も厚みのあるものとなっていよう。

年度末には、各教師あるいは学年団や研究部会に、それらを再整理する作業を導入してもらいたい。それをここでは、「研究ポートフォリオ」の作成と呼ぶことにしよう。それは、具体的には、これまでにファイル等に蓄積してきた資料やデータを並べ替えて、それらにインデックスをつけるといった作業である。時間があれば、内容のまとめりごとに、資料や記録の要旨も作成しておきたい。

研究ポートフォリオの作成は、教師たちに、1年間の学校研究の過程を想起し、異なる時期の営みや複数の人間の試みを連結することを促してくれる。また、学校研究の今年度の成果と次年度に向けての課題を議論する際の論点の明確化に役立つ。

なお、8月号でその内容を検討した、公開研究会開催時に作成する研究紀要は、研究ポ

ートフォリオの一種と考えてよい。ただし、秋にこれを作成している場合には、その再構成が必要であることは言うまでもなからう。

(2) アンケート等の実施

学校研究を総括する前に、教師、児童・生徒、保護者を対象とするアンケート調査をあらためて実施しておく为好都合だ。

まず、教師向けのものでは、主として、学校研究の企画・運営に対する意見を集めることが目指されよう。教師たちに、学校研究のテーマ、組織、授業研究や公開研究会のプログラムなどについて、思いや悩みを率直に表明してもらおうとよい。

また、児童・生徒にはいわゆる授業評価を、保護者には実践研究の推進を観点とする学校評価を試みてもらい、学校研究総括のための評価情報をさらに密にしておきたい。

3. 次年度に向けての意思決定

2のような作業を通じて、学校研究総括の準備が整ったら、いよいよ協議の場面が設定されることになる。それは、次年度の学校研究に関する意思決定に他ならない。

例えば、今年度の学校研究の成果が十分に確認された場合には、それを発展させたテーマを設定するのか、それともテーマ自体は継続させてアプローチの精練を図るのかを教師たちは決定する必要がある。

成果が十分には得られなかった場合には、さらに選択肢が広がる。設定した学校研究テ

ーマ自体に妥当でない部分があったと判断する場合、テーマではなく研究の枠組みや進め方に問題があったと考えてその企画・運営に工夫を凝らそうとする場合、テーマや枠組み・進め方以外の要因により成果が得られなかったので取り組み自体は継続すべきであると決定する場合など、次年度の学校研究の方向性は様々だ。各学校で、教師たちが共同で、より妥当な方針を採択することになる。

4. おわりに

本連載では、学校を単位として教師たちが共同で取り組む実践研究を「学校研究」と定義し、その理念と手続きを解説してきた。本連載で筆者が記してきた「学校研究の年間スケジュール」は、読者が学校で取り組んでいる実践研究の点検・評価、そして改善に役立つものとなったであろうか。

連載の冒頭で主張したように、今日、社会が学校に期待するものは数多く、また多様である。それゆえ、教師たちには、学習指導・評価のいっそうの充実に向けて、同僚との共同による創造的な活動、新しいチャレンジが要請されているし、また不可欠となっている。多忙化の中でそれを負担であると感じる向きも少なくなからうが、学校研究における教師たちの努力や工夫は、子どもたちの学びにおけるそれに必ず再帰する。彼らのために、教師たちには学校研究への参画を教職の営みの支柱に据えてもらいたいと思うし、筆者もそ

れに対する協力や支援を自分なりに続けていきたい。その決意を記して、本連載の締めくくりとさせていただきたい。

なお、筆者は、学校研究を含む、「授業研究と教師の成長」に関する情報提供や提案を、<http://toshiyukikihara.cocolog-nifty.com/>にて試みている。ご覧いただき、コメントなどをお寄せいただければ幸甚である。

今月のポイント

学校研究は、年度をまたいで発展させるべきものである。

学校研究の総括に向けて、研究ポートフォリオの作成やアンケートの実施などの作業に、教師たちに従事してもらいたい。

学校研究の1年の最終段階において、次年度の方針等を、いくつかの選択肢の中から採択することになる。